

〈修士論文要旨〉

## 近畿地方東部の弥生時代後期から古代前半期における 地域色の様相とその変遷

—伊賀・伊勢地域の土器煮炊具を主な資料として—

井 戸 竜 太\*

旧国伊賀・伊勢・志摩によって構成されている三重県は、近畿地方に属し、その東部に位置している。三重県は、鈴鹿山脈、布引山地、紀伊山地と南北に連なる西備山間部において、北から滋賀県、京都府、奈良県、和歌山県に接しており、北東部においては鈴鹿山脈から派生する養老山地を境として岐阜県に、伊勢湾岸沿いでは愛知県に接している。県庁所在地である津市は、西部の山間地帯から流れ出た大小の河川によって、伊勢湾岸沿いに発達した沖積低地である伊勢平野の中央部付近に位置している。同県は、都道府県を東ねた地方レベルでの大行政区画としては近畿地方にくくられているが、伊勢とその南側の小半島を占める志摩は、伊勢湾に面し、地理・気候などの自然条件的には、大行政区画レベルで言う中部地方の太平洋岸地域を指す東海地方に属していることは言を要しないだろう。旧伊賀国地域は、伊勢平野西側の布引山地西部の上野・名張盆地を中心としており、東海地方に地属する伊勢・志摩とは自然条件を大きく異にしている。

この近畿東部地域は、古代において中央政権が所在する主都、都城の近郊国である（五）畿内とそれより以東の東国との境を含み、時代による境の変動が読み取れる両地域の間地帯でもある。東国は、壬申の乱において、その力と存在及び中央勢力との関係性が歴史上に明確にその姿を現せる。7世紀後葉の日本国が成立する天武朝期直前段階において、国家成立を加速させるポイントでもある壬申の乱においては、後の天武天皇である大海人皇子を支え、勝利への主戦力ともなって乱を勝利へと導く東国の諸勢力は、日本国の成立の大きな原動力の1つとなっていた。網野善彦氏の研究（網野2000）によれば「日本国」の成立する前後の「東国」は、三河・信濃以東の東海・東山道、あるいは伊賀以東の東海道、美濃以東の東山道を指す地域名称であり」としている。この文章の論拠の1つは、律令国家成立によって施行された五畿七道制にあると考えられている。日本国の成立前後とする時期を7世紀後半頃の幅で理解すると、その頃の畿内と東国の境は、伊賀と大和との国境付近にあり、伊賀を西辺に含む三重県は、ほぼ全域が東国となり、東国においては、畿内に最も近い地域（国々）となる。その後の中世初頭頃の文治元年（1185）頃には、尾張以東が東国と記されるようになったとされており、その頃には伊勢と尾張=三重県と愛知県の国境が、東国の西辺の境となっている。このことから見ると、古代のある頃からは、「伊賀・伊勢」は「畿内近国」の範囲内と認識されるようになったと理解される。近代以降に多用される「近畿」の語源は、この「畿内近国」にあると考えてよいだろう。

このような伊賀・伊勢両地域の地域史を、国家成定期を含む弥生時代後期から古代前半期とい  
平成20年度 \*文学研究科文化財史科学専攻

うかなり長い時間幅で、隣接する畿内・近江及び東海地方の諸地域との関係性の変化から捉え直すことは、日本史枠で畿内と東国の歴史的関係性の変化と発展への理解を深める上で、必要な基礎的歴史研究作業であると考えている。国家成立期の前史段階は、両地域とも文献史料も乏しく、地域史レベルの歴史過程の考察は、考古資料を用いることなくしては難しいと考えている。なお、伊勢は、このような本来的課題に加えて、畿内政権中枢部と直結する形で国家神を祀る伊勢神宮が形成される。国家神を祭る神社がなぜ畿内ではなく、伊勢の地であったのか、また伊勢神宮が形成された前後に伊勢の地域色がどのように変化するのか等、本質的問題にアプローチする考古学的研究は大きく進展しているとは見られない。国家成立期以前の古墳時代の伊勢における国家レベルの祭祀及び伊勢神宮の成立過程に対する既研究は、文献史を中心に多く見られるが、本論では考古資料から若干の考察を試みるが、概括的レベルに留めておく。

本論では、旧伊賀国・伊勢国を中心とする両地域それぞれに弥生時代後期には既に形成された生活文化レベルでの地域色を古代前半期までの約600年の期間にわたり、その様相の変化を研究することによって地域史の一面を把握し、それらを両地域間及び近接する周辺地域と比較研究することによって、両地域及び畿内と東国の関係性についての歴史的理解を深めて、提示したいと考えている。地域色及びその歴史を研究する主資料は、両地域だけに留まらないが、対象とする弥生時代後期から古代前半期の各時期を通じて途切れることなく出土遺物の中で主体を占めながら大量に出土する土器煮炊具とする。このような出土状況を示す土器煮炊具は、その地域に住み続けた人々が、基本的な生活用具として作り続け、日常的に大量に使用を続けたものであり、方言と同様に明確な地域色を見出せる考古資料である。考古資料に見出せる地域色に対する研究は、その地域で生業を営み定住し住み続けた人々が、その地域の自然環境に対応して生き続けた結果として、醸成された歴史過程を有した特色ある地域文化とその歴史を理解する上で、必要な考古学的方法による歴史研究作業であると考えている。考古資料からの地域史の復元は、その地域に住む人々の歴史を理解することであり、他面では国家レベルでの歴史過程を生活文化レベル=民衆レベルの視点から捉え直す作業であると考えている。